

第6回あゆ王国高知振興ビジョン推進協議会 議事概要

■開催日時：令和6年5月28日（火）13:30～16:00

■開催場所：高知共済会館 3階大ホール「桜」

■出席委員：黒笹会長、岡村副会長、坪井委員、百田委員、鍵山委員、西脇委員、林委員、西内委員、吉村委員、門田委員

■議事：

（1）本年度の取組について（資料1～2に基づき県、市町村から説明）

○観光、高知県への集客に関する意見

- ・外国人が観光で一番求めるものは体験と地域の生活の様子を知ることであると思うため、「どっぷり高知旅」キャンペーンを活かしてインバウンドを意識した取組を実施していただきたい。

体験メニューで鮎の試食を通じて鮎を知ってもらい、鮎が生息するきれいな川と水の状況も合わせて見てもらうことが効果的と考えられる。（黒笹会長）

- ・インバウンドの場合、具体的な食のレシピ開発を個人や漁協単位ではなく、県全体で連携する必要がある。県全体で作ると他県にも負けない県独自の食のアピールや和食文化を広められると思う。（百田委員）

○あゆに触れられる機会作りに関する意見

- ・アユイングの場合は児童生徒など若い世代が普段からルアーを使っているため、取り組みやすいと感じる。若い世代にアユの文化に入ってもらうためにも、アユイングは将来的に見ると重要となる。（黒笹会長）

- ・芸陽漁協でもアユイングを2セット用意して、体験等を通じた普及を予定しており、漁協の関係者等で検討していきたい。（門田委員）

- ・相模川ではアユイングを導入した結果、遊漁券の収入が3倍に増加したところもあり、すでに友釣りよりもアユイングの方が多いう状況になっている。

和歌山県や三重県でもアユイングを始める動きがあり、アユイングのみのフェスやあゆ釣りイベントもあるため、それらの取組も面白いと感じる。（坪井委員）

○流通販売に関する意見

- ・四万十川の遊漁者の様子を見ると、釣った鮎を持ち帰るより、売って帰る人が多いと感じるため新たな集出荷の拠点ができればあゆ釣り人口と出荷量も増えるなど展開は広がる。（門田委員）

- ・集出荷の体制構築と冷凍の技術が上がれば年間を通じて流通は促進されると思う。（黒笹会長）

○情報発信に関する意見

- ・外国人向け観光情報サイト「VISIT KOCHI JAPAN」で5カ国語での情報を発信しているが、あゆ体験に関する紹介はまだできていないため、今後あゆ関連の情報を充実させていく。大手旅行会社向け商談会の後の懇親会であゆを食べてもらうチャンスはあるので、体験メニューと合わせて考える。(鍵山委員)
- ・情報量が多い中で、自分が興味を持てる場所を自分から探しに行ける仕組み作りが課題であると考える。【例：県民がおすすめる高知家ランキング】(岡村副会長)

○その他意見

- ・昨今の担い手不足により、あゆに関する新しい取組が人力的に難しいことも考えられるため、地域おこし協力隊のあゆバージョンも効果的と感じる。(岡村副会長)

(2) 作業部会の取組について(資料3～5に基づき事務局から説明)

○環境保全に関する意見

- ・今年の鮎の状況は壊滅的で、西日本・太平洋側は渇水と日照りで減少傾向となっている。海水温度の上昇でアユの代謝が上がる一方で、餌となるプランクトンが湧かないため、鮎が餓死してしまう。また、水が少ないと遡上にも時間を要する。鳥取県は、鮎の資源量が約8年連続で壊滅的であった中、今は回復しているため、その事例の参考にすることが有効であると考えられる。(坪井委員)
- ・県内の一部の河川では砂をかぶり大きな石が少なくなっており、河川そのものがあゆが生育しづらい環境になっている。そのため、ダムなどの土木工事で大きな石が出た場合は、それを川に入れてもらえると自然に下流へ流れ着き、石に藻が生えてあゆが生育しやすくなるため、検討してほしい。(吉村委員)
- ・四万十川の上流であゆが見られなくなっているため、あゆ王国ビジョン推進協議会の資源・環境保全部会であゆに特化した調査の実施を検討してほしい。四万十川の河川環境改善を目指した新組織(高知県四万十川流域保全振興委員会(仮称)河川環境保全部会)では、河川環境に特化した調査を実施予定となっている。(四万十市)

○その他意見

- ・あゆビジョンの2期目では、キーワードが目標値となっているが数字だけでは表現できない取組の素晴らしさもあるため、「評判が良くなった」など実感の共有が大切だと感じる。あゆを多くの方に食べてもらうなどの全方位施策の取組やインバウンド向けの対象を絞った取組など関係者一丸となってビジョンを推進していきたい。(岡村副会長)

以上